

「べこごのみ」で挑戦！ 飼料イネの無コーティング直播

近年、東北地域において、飼料の自給率向上と水田の有効利用等の観点から稲発酵粗飼料用の飼料イネの作付面積が拡大しています。飼料イネの生産には食用米以上の低コスト・省力化が求められ、直播栽培の導入が期待されています。その中で湛水直播では、通常、出芽苗立促進のために酸素供給剤をコーティング（粉衣）した種子が用いられますが、資材費や春先の繁忙期の粉衣作業が負担となっています。そこで、湛水直播における低コスト化と労力負担の低減を図るために種子粉衣を省略した湛水直播栽培について、東北中北部向けに開発された早生飼料イネ専用品種「べこごのみ」を用いて検討しました。

《気象条件のよい5月下旬の播種で苗立確保》

酸素供給剤を粉衣した場合は5月上旬頃から播種が行われますが、酸素供給剤を粉衣しない催芽種子を播く場合、播種時期の設定が問題となります。鳥害対策や浮き苗、転び苗防止のため土中播種が望まれますが、寒冷地ではまだ平均気温が低い場合が多いため、種子粉衣を行わない種子では十分な苗立が確保されない懸念があります。そこで、播種後10日間の平均気温が15℃に達し、降水量も少ない5月下旬に播種することによって、土中播種でも土壌表面播種に近い苗立を確保することができました（図1）。作業スケジュール的にも、5月下旬は食用米の田植作業が一段落する時期であり、降雨の少ない時期でもあるため余裕をもった作業計画をたてることができます。

《食用米収穫前にホールクロップ収穫》

播種時期を遅らせることによって、収穫時期の遅れや収量低下の懸念もあります。6月上旬に「べこごのみ」を播種し

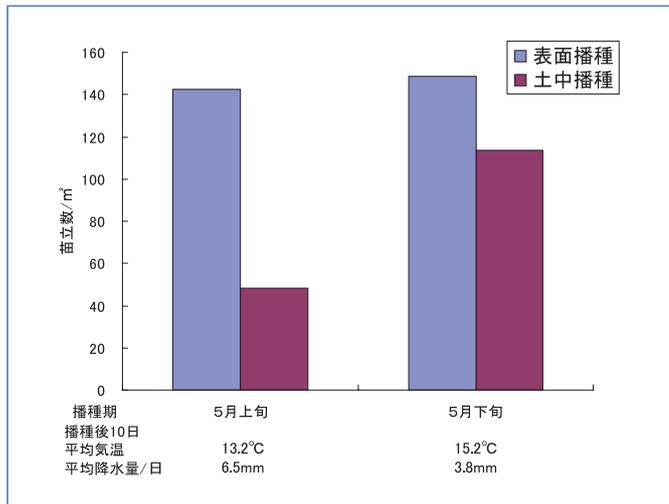


図1：「べこごのみ」無コーティング直播における播種期別苗立率（2006、2007年の平均）

東北飼料イネ研究チーム

山口弘道

YAMAGUCHI, Hiromichi



た場合は、出穂が8月下旬にずれこみ、黄熟期収穫は9月下旬の食用米の収穫作業の最盛期と重なってしまいます。一方、5月下旬に播種した場合は8月中旬には出穂するため、食用米収穫前の9月中旬には黄熟期収穫が可能です（図2）。また、6月上旬播種では全乾物収量が十分確保されない場合がありますが、5月下旬播種の場合は十分な全乾物収量を確保することができました（図3）。

現在、岩手県内の山間地域で現地実証試験も行っておりますが、このように「べこごのみ」を用いた無コーティング湛水直播により飼料イネ生産の更なる低コスト・省力化が図られ、従来品種では困難であった作業計画が可能になり、東北地域における飼料イネ栽培の普及と定着が進むことが期待されます。

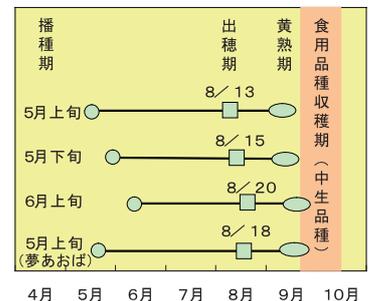


図2：「べこごのみ」無コーティング直播における播種期別出穂期および黄熟期

（2006、2007年の平均、黄熟期は）
出穂後30日を基準とした。）

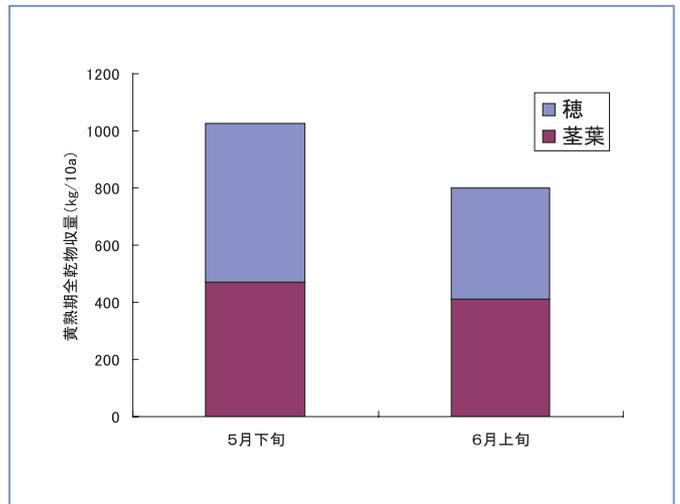


図3：「べこごのみ」無コーティング直播における播種期別黄熟期全乾物収量（2006、2007年の平均）